英語多読の語数と期間が成績に与える影響の分析結果

1. 概要

本分析は、2024年度卒業生の1年7月模試（記述）から3年11月模試（計）までの偏差値の推移と、最終的な共通テストR（リーディング）、L（リスニング）のスコアについて、多読の総語数と実施期間の長短が与える関連性を調査したものです。

初期学力、期間の長さ、語数の多寡という複数の側面から分析した結果、**多読の継続的な実施と総語数の多さが、成績の低下を抑制し、最終的な高得点獲得に強く関連している**という明確な傾向が確認されました。

---

2. 多読の「期間の長さ」が成績推移に与える影響

多読の実施期間を4つのグループに分け、1年7月模試から3年11月模試までの偏差値の伸び（変化）を比較しました。

多読実施期間	実施期間の目安	偏差値の伸び（変化）	傾向
長期間	2年4月～3年 (約20ヶ月)	**-0.65**	**成績の低下が最も抑制され、ほぼ維持された。**
中期間	2年4月～2年3月 (約12ヶ月)	-0.83	長期間に次いで低下が抑制された。
短期間	3年4月～9月 (約6ヶ月)	-2.41	低下幅が大きく、維持効果は限定的。
少	ほとんど実施せず	**-3.36**	**最も成績が大きく低下した。**

結論：
多読は、長期間（1年～2年）にわたって継続的に実施することが、特に受験期（3年次）にかけての成績低下を強く抑制し、成績を安定的に維持する上で最も重要である。実施しないグループは、成績が大幅に低下する傾向にある。

3. 多読の「総語数」が成績推移と共通テストに与える影響

生徒を総語数で分類し、成績の伸びと最終的な共通テストスコアへの影響を比較しました。

3-1. 偏差値の伸びとの関連（1年7月 → 3年11月）

グループ	平均多読語数	偏差値の伸び（変化）
高語数 (上位33%)	88,409語	**+1.4** (上昇)
中語数 (中位33%)	44,484語	-0.8 (わずかに低下)
低語数 (下位33%)	18,978語	-2.1 (低下)

結論：
多読語数が多いグループのみが、3年11月の模試までに偏差値をプラス成長させている。多読語数は、単なる成績維持ではなく、成績を向上させるための推進力として機能している。

3-2. 共通テストR/Lとの関連

特に共通テスト**リスニング（L）**において、多読語数が高得点に強く関連していました。

共通テストスコア	高語数グループ平均スコア	低語数グループ平均スコア	差
R（リーディング）	50.55点	49.75点	0.8点
L（リスニング）	**54.49点**	46.85点	**7.64点**

結論：
多読の語数は、リーディングよりもリスニングの最終スコアにより強く正の関連を示しており、大量の英語処理経験がリスニング力の向上に寄与している可能性が高い。

---

4. 初期学力の高低と多読語数

初期学力（1年7月模試）のレベルごとに、多読語数が成績推移に与える影響を分析しました。

初期学力レベル	多読語数の多いグループの傾向	多読語数の少ないグループの傾向
低位 (偏差値 ＜44.0)	3年11月までの低下幅が**半分以下**。最終共テRスコアが**+5.3点**高い。	成績が大きく低下し、最終成績も低い。
中位 (偏差値 44.0～52.0)	3年11月までに偏差値を**+0.9向上**。最終共テRスコアが**+4.2点**高い。	3年11月までに偏差値が**-2.3低下**。
高位 (偏差値 ＞ 52.0)	3年11月までに偏差値を**+1.9向上・維持**。平均多読語数は**95,780語**。	3年11月までに偏差値が**-3.8と大きく低下**。平均多読語数は**37,860語**。

結論：

1. **多読は初期学力の高低に関わらず効果的である。**
2. **初期学力が低い生徒**にとっては、多読は**成績の土台を支え、成績の大きな落ち込みを防ぐ**上で特に重要。
3. **初期学力が高い生徒**であっても、多読語数が少ないと**成績が大きく低下**する傾向があり、多読は**優位性を維持するための必須条件**である。

---

5. 成績維持・向上に必要な語数の推定

過去のデータから、3年11月までの偏差値推移に基づき、必要な多読語数を以下のように推定します。

目標	推定される必要な総語数	関連する成績推移の傾向
成績低下の抑制	**約40,000語～50,000語**	成績の急激な低下（-3点以上）を避け、成績を維持するための最低ライン。
成績の明確な向上	**約75,000語～95,000語以上**	偏差値をプラス成長させ、最終的な共通テストRスコアで他グループを明確に上回る優位性を築くための目標値。

多読は、**早期に開始し、7.5万語以上**を目指して継続的に取り組むことが、最も成績に対する正の関連性が高い学習方法であると結論付けられます。